

第2章 都市づくりの目標

都市づくりの基本理念とそれに基づく市の将来の都市の姿を示します。

- ◆都市づくりの基本理念
- ◆将来都市像
- ◆将来人口フレーム
- ◆将来都市構造

【第2章 都市づくりの目標】の構成

1.都市づくりの基本理念		●次世代へ価値ある資産を継承 ●深谷らしさの創造 ●市民との協働
2.将来都市像	(1)都市づくりのテーマ	誇りと愛着をもてる 田園交流都市 ふかや
	(2)都市づくりの基本方向	●各地域の特性を発揮させ、バランスのよい都市づくり ●人にやさしい交通環境の形成 ●安全・安心で、持続可能な都市づくり ●緑の保全と創出 ●市民が誇りと愛着を感じられるような景観の創出 ●市民とともに交流を通して創出する深谷らしいまちづくり
3.将来人口フレーム	(1)目標年次	平成42年
	(2)将来人口	約13万人
4.将来都市構造	(1)将来都市構造構築の方針	
	(2)将来都市構造	●軸～深谷を貫く都市機能と自然の骨格～ ●拠点～深谷の都市機能集積、産業集積、自然資源の核～ ●ゾーン～深谷の土地利用のまとまり～

第2章 都市づくりの目標

1. 都市づくりの基本理念

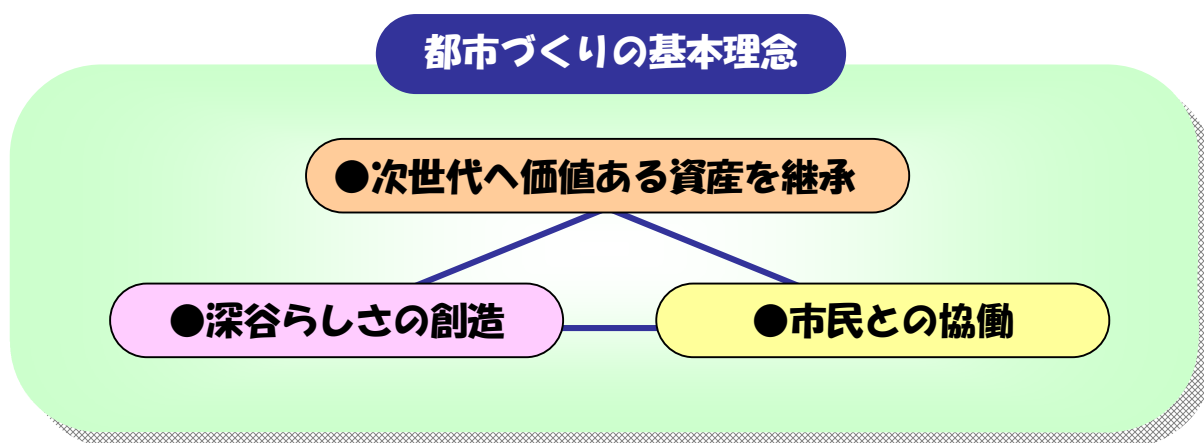
深谷市総合振興計画において、次のように基本理念を定めています。

【深谷市総合振興計画の基本理念】

「未来への責任」、「個性の発揮」、「市民自治と協働」をこれからの地域社会において何よりも大切にすべき基本的な価値と考えて基本理念として掲げ、新しい時代にふさわしい「深谷らしいまちづくり」を基調として進めます。



深谷市都市計画マスタープランでは、深谷市総合振興計画の基本理念を受けて、「市の都市計画の総合的な指針」を定めるという観点から、次のとおり基本理念を定めます。



●次世代へ価値ある資産を継承

都市とは、人がつくり、つかうものです。また、つくったら終わりではなく、つかい続けて生き続けるものです。未来の子どもたちへ、より良い状態で都市・環境を引き継いでいくことは非常に重要なことです。

環境保全と開発のバランスを考慮しながら、エコ・コンパクトな集約型の都市構造の実現を目指すとともに、都市基盤施設などについては、適正に維持管理を行い、次世代へ引き継いでいきます。

また、地球温暖化、オゾン層の破壊など地球規模の環境問題についても身近な地域から解決していくべき課題はたくさんあります。持続可能な社会システムを構築することで、都市として総合的な環境資産を次世代へ継承することを目指します。

●深谷らしさの創造

本市の有する資源は多種多様であり、歴史的には、中山道の宿場町、渋沢栄一関連の史跡など、自然資源としては、利根川、荒川、鐘撞堂山、櫛挽の防風林など、市民参加としては、ガーデンシティふかやの取り組みを始め、各地域に多くの祭りや伝統芸能などがあります。また、多様な農産物を生産していますが、特に、野菜、花きなどは、全国有数の生産地となっています。

これら本市の特色を活かし、個々の魅力を向上させるとともに、ネットワーク形成などにより連携を強化し、他市町村に発信できる「深谷らしさ」を形成していきます。

この「深谷らしさ」の形成は、市民の市への愛着や誇りの醸成にもつながります。また、この都市づくりの基本理念全体の目指す取り組みそのものが、「深谷らしさ」となることを目指していきます。

●市民との協働

まちづくりは、他人（ひと）に任せるのではなく、このまちに暮らし、学び、働き、まちを愛する市民、事業者などと行政が、ともに力と知恵を出し合い、協働で行うことが重要です。

都市を舞台に、主人公である市民がまちづくりに関わり続けることによって、地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上することが可能になります。

より良いまちづくりに向け、行政と市民が手を携えて、前向きに取り組むことを目指します。

2. 将来都市像

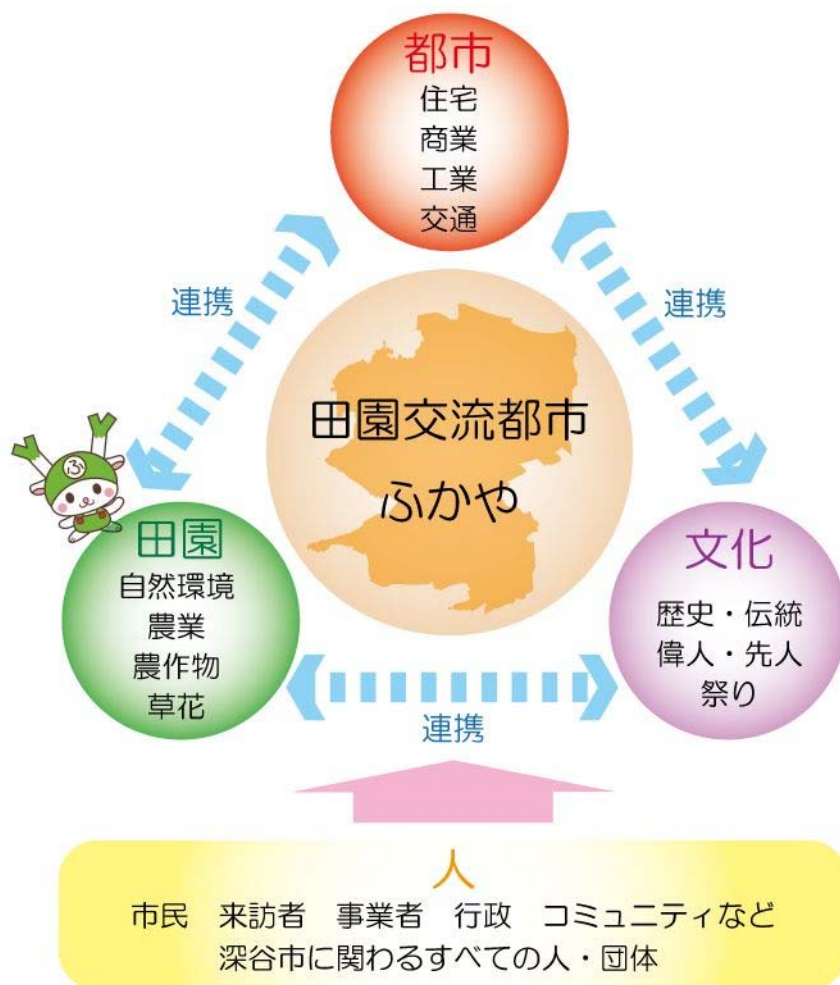
(1) 都市づくりのテーマ

誇りと愛着をもてる 田園交流都市 ふかや

～都市・田園・文化が織りなすまちづくり～

本市では、「次世代へ価値ある資産を継承」、「深谷らしさの創造」、「市民との協働」の3つの柱を基本に据えた都市づくりを、本市を構成する「都市」、「田園」、「文化」の要素を連携させ、かつ、様々な人々との交流を通して進めることにより、市民が、深谷で育つ、学ぶ、働く、遊ぶ、住まうことに誇りを持てる、また、愛着を感じられるような田園交流都市となることを目指します。

【都市づくりのテーマの概念図】



(2) 都市づくりの基本方向

●各地域の特性を発揮させ、バランスのよい都市づくり

都市づくりの基本となる土地利用の配置については、以下に示す基本方針のもと設定します。

- 集約型都市構造へ向けた取り組みを推進し、エコ・コンパクトシティを形成
- 深谷駅周辺（中心市街地）は市全体の都市拠点、上柴地区、岡部駅周辺、武川駅周辺、小前田駅周辺は、市民に身近な地域拠点として都市機能を集積、花園インターチェンジ周辺は、広域からの来訪者の誘導ならびに各拠点の機能及び近隣都市との交流や連携を図る拠点としての機能を集積
- 市街地・集落における快適で良好な居住環境の形成
- 広域交通網へのアクセス性を活かした生産流通や物流などの機能を有する複合的な拠点づくりの推進など新しい産業活力の創出
- 都市整備を推進すべき地域と田園環境を保全すべき地域を明確にし、適正な土地利用の規制・誘導方策を推進

●人にやさしい交通環境の形成

都市の基盤となる道路、公共交通などの交通環境については、以下に示す基本方針のもと整備を進めます。

- 市民の移動の基盤である道路については、着実に整備を推進し、適切に維持管理を推進
- 自転車・歩行者の安全性、利便性の向上に資する道路整備の推進
- 交通弱者などの移動を確保する総合的な交通施策の推進

●安全・安心で、持続可能な都市づくり

総合的な生活環境の向上に向けて、以下に示す基本方針のもと整備を進めます。

- 防災・防犯に配慮した市街地整備を推進し、災害に強い都市を形成
- 上・下水道、河川などの基盤整備については、着実に整備を進め、施設の老朽化に対しては、適切な維持管理のもと整備・改修を推進
- 環境負荷の少ない循環型のシステムを構築し、持続可能な都市を実現
- すべての整備において、誰もが利用しやすいユニバーサルデザイン*の視点を重視

●緑の保全と創出

自然生態系の維持、都市環境の改善などの役割を担うとともに、市民生活に潤いと安らぎをもたらす重要な要素である緑については、以下に示す基本方針のもと保全・創出を図ります。

- 河川の緑の活用や道路緑化の推進により緑の環、緑の軸を形成するとともに、緑のネットワークの結節となる緑拠点の形成
- 市街地における身近な緑地の創出や市民緑化活動の促進などによりまちの緑を活性化
- ふるさと風景を形成する緑地や歴史・文化と融合した特色ある緑など貴重な緑の保全・活用

(「深谷市緑の基本計画*」より)

●市民が誇りと愛着を感じられるような景観の創出

文化の香る深谷らしい景観を創出するために、以下に示す基本方針のもと整備・保全などを進めます。

- 中心市街地において美しさと賑やかさを生み出す取り組みの推進
- 市民が慣れ親しみ、深谷の原風景としての田園景観の保全・再生
- 歴史的景観の保全と活用
- 景観形成施策の展開

●市民とともに交流を通して創出する深谷らしいまちづくり

本市が、市民に親しまれ、愛され、誇りをもてる都市となるために、以下に示す基本方針のもと市民と協働してまちづくりを進めます。

- 市民にまちづくりへの参加機会を提供するとともに、市民への情報発信を充実
- 市民の意向を受け止め、行政に活かすしくみの充実
- 市民の主体的参画によるエリアマネジメント活動などを支援
- まちづくりに関する交流機会の創出と支援
- 交流人口の増加に向け、広く本市の魅力の情報発信を強化

3. 将来人口フレーム

(1) 目標年次

都市計画マスタープランは、概ね20年間の都市づくりの基本方針を示すものです。

この都市計画マスタープランは、平成42年（西暦2030年）を目標年次に設定します。

目標年次：平成42年（西暦2030年）

(2) 将来人口

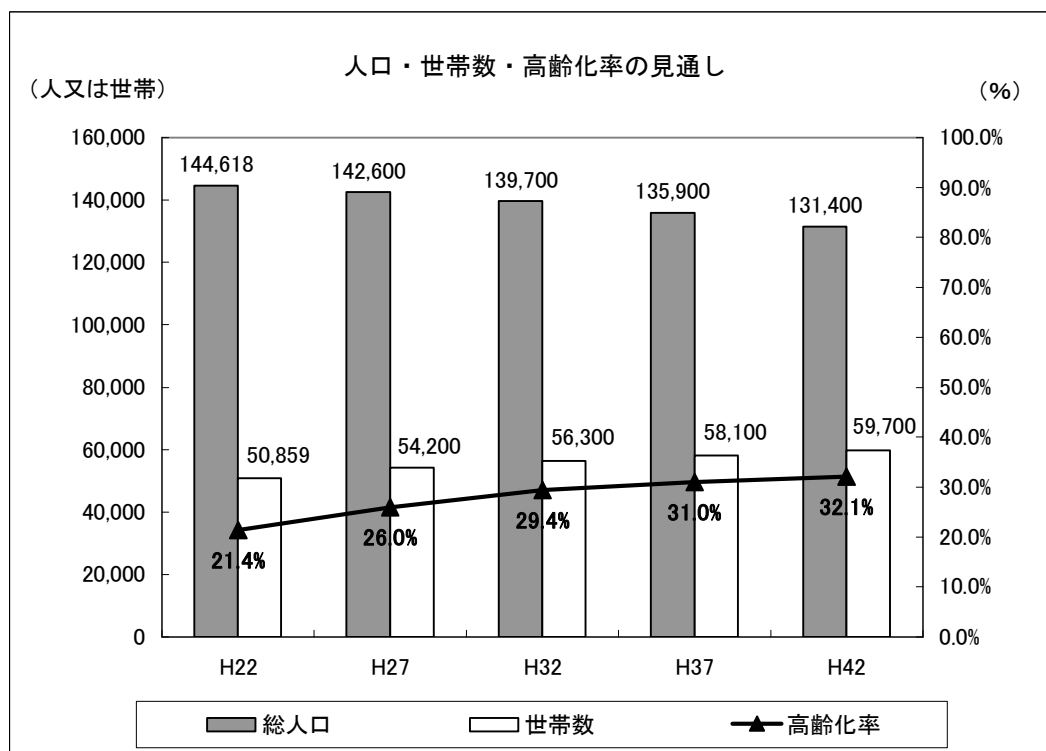
近年の本市の人口は14万人台で推移し、高齢化率は2割を超えています。全国的には人口減少の傾向になっており、これまでのような右肩上がりの人口増は期待できません。

平成17年と平成22年の人口から将来人口を推計した結果、本市の平成42年の将来人口を13万人と想定します。

一方、単独世帯の増加などの要因により、世帯数は増加傾向にあり、将来においてもこの傾向が続くと想定し、平成42年には約6万世帯とします。

**将来人口：平成42年（西暦2030年） 約13万人 高齢化率（約32%）
世帯数（約6万世帯）**

【将来人口・世帯数・高齢化率の見通し】



※平成22年は国勢調査、平成27年以降はコーホート要因法*による推計値

4. 将来都市構造

(1) 将来都市構造構築の方針

これからの都市づくりは、大量消費・拡大型ではなく、徒歩、自転車、公共交通による移動性を重視し、様々な機能が比較的小さなエリアにまとまって配置されている環境負荷の小さい集約型の都市を目指すことが重要です。

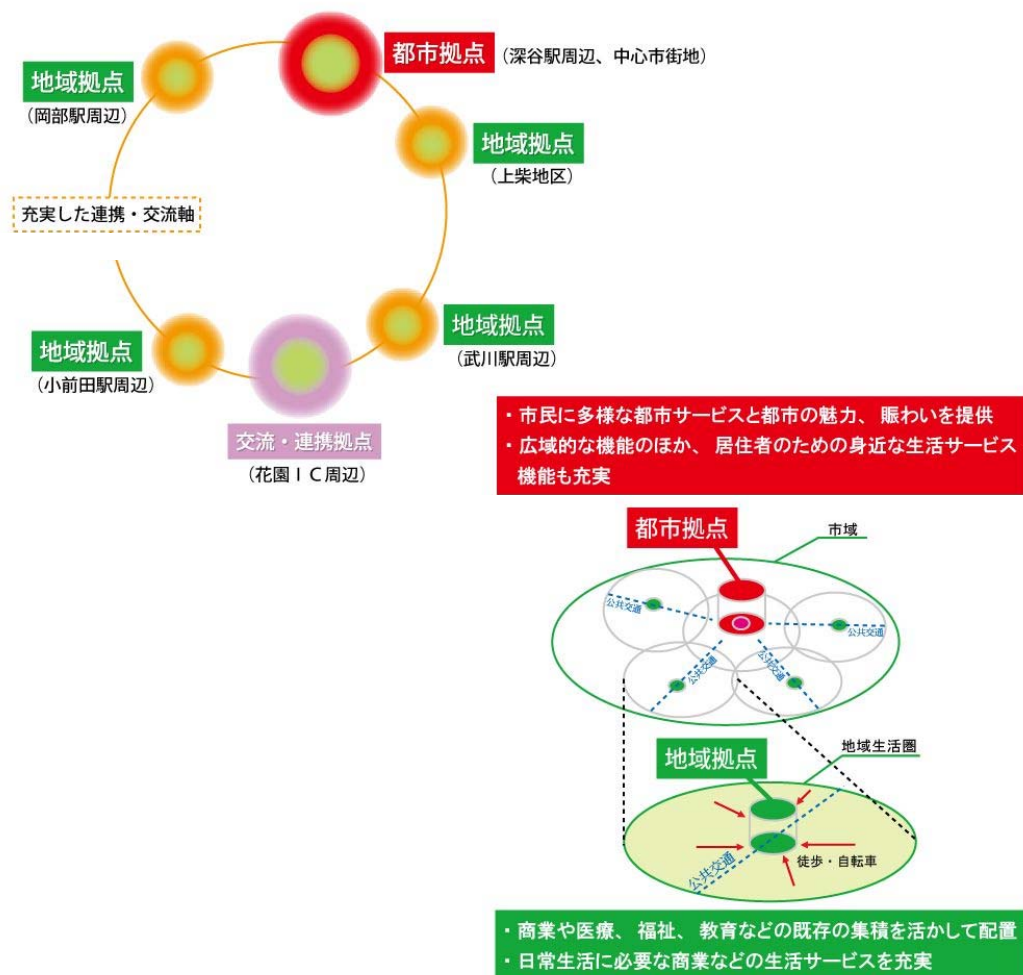
基本的な方針としては、都市づくりの基本理念及び都市づくりの基本方向でも整理したようにエコ・コンパクトな集約型都市構造の実現へ向けた都市構造の構築を目指します。

合併に伴い策定された深谷市総合振興計画では、主に、J R 高崎線及び秩父線の駅を中心とした核となる拠点と、それを補完する拠点から構成される都市構造が示されています。これらの拠点は旧市町の中核拠点であり、本市においてはそれぞれの拠点としての役割を整理し、広域的な都市計画の調整・運用も視野に入れ、都市計画マスタープランとして明確にする必要があります。

具体的には、深谷駅周辺の中心市街地を都市の競争力をけん引する広域的な機能を担う都市拠点とし、それを地域の生活を支える機能を集積した地域拠点が補完しつつ、これらの効果をより高めるよう、各拠点間や他の都市との活発な交流・連携が可能となるような都市構造を構築していきます。

さらに、前述の都市づくりの基本方向を、具体化していくことにより、その実現を目指します。

【深谷らしい集約型都市構造のイメージ】



(2) 将来都市構造

本市は都市の軸を構成する資源を多く有しています。まず、北を利根川、南を荒川という2つの大きな河川軸に挟まれていることが特徴的であり、さらに、北から順に、上武国道、深谷バイパス、J R 高崎線、一般国道 140 号バイパス、秩父線、関越自動車道といった交通動線が通っています。これらの河川、鉄道、道路と、深谷駅を中心に放射状に形成されている都市幹線道路を軸の骨格とします。

これらの軸の骨格で、本市内の拠点などをつなぎ、束ねて、「都市内連携軸」とします。この軸は、広域的な視点では周辺都市間との連携を担う「都市間連携軸」としての機能も有しています。この2つの役割を持つ連携軸を都市機能連携軸と位置づけます。

また、市内には集約型都市構造の核となる拠点や、産業拠点、緑の拠点があり、さらに、住宅系・産業系市街地、農地を中心とした田園地域が土地利用のベースとなっています。これらを具体化すると以下のように設定されます。

●軸 ～深谷を貫く都市機能と自然の骨格～

☆都市機能連携軸

- 高崎線都市機能連携軸：J R 高崎線沿線、一般国道 17 号沿道を核に連なる都市機能連携軸
- 秩父線都市機能連携軸：秩父線沿線、一般国道 140 号バイパス沿道を核に連なる都市機能連携軸

☆自然軸

- 利根川流域軸：利根川と沖積低地*に広がる田園農地を中心にした空間軸
- 荒川流域軸：荒川と沿川の農地、集落などの多様な土地利用を構成する空間軸

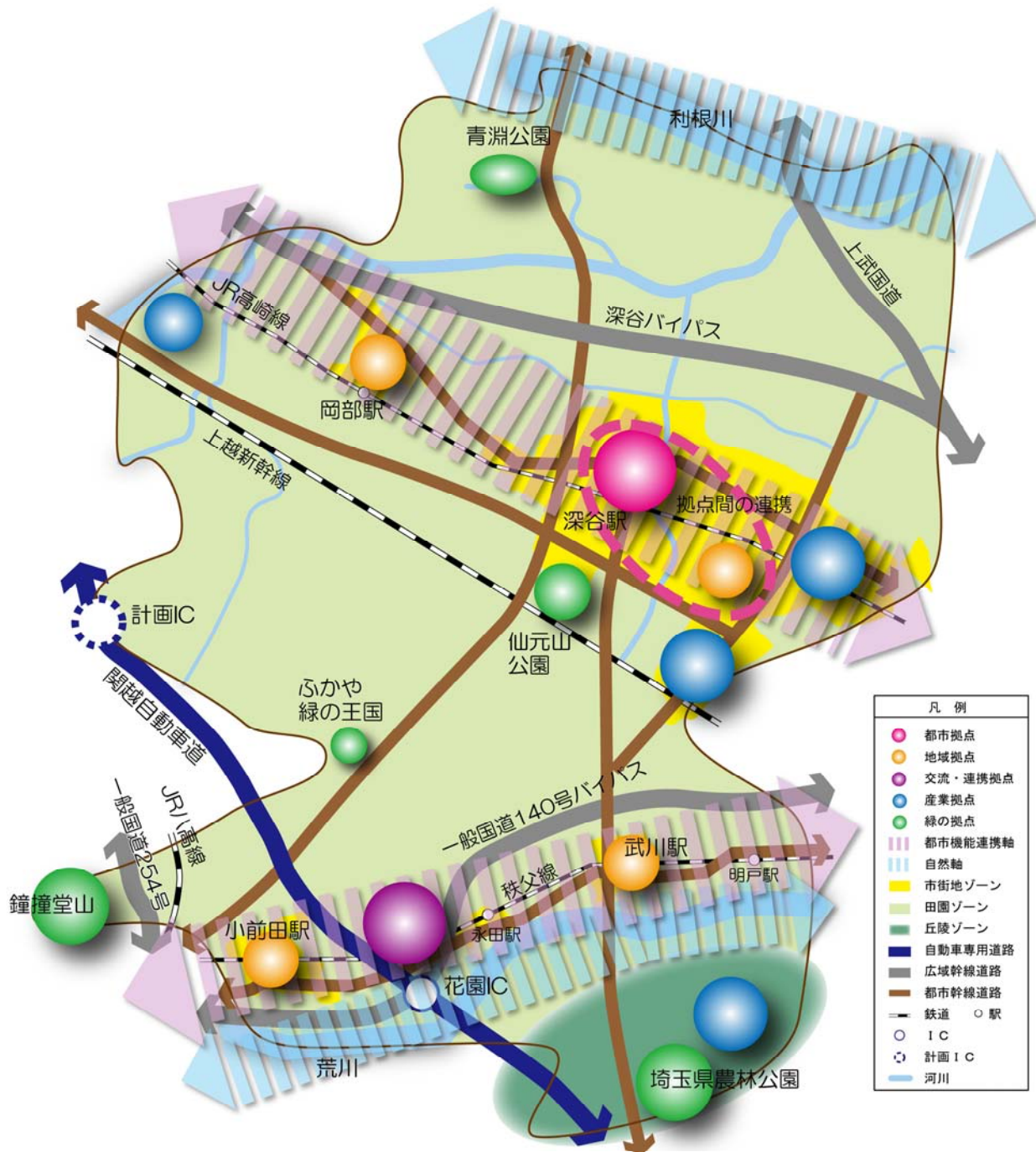
●拠点 ～深谷の都市機能集積、産業集積、自然資源の核～

- 都市拠点：本市の中核となり、商業業務、交通結節点*、都市型居住などの複合機能の集積拠点。深谷駅周辺（中心市街地）
- 地域拠点：地域の核となり、商業業務、交通結節点、生活利便機能などが集積する拠点。上柴地区、岡部駅周辺、武川駅周辺、小前田駅周辺
- 交流・連携拠点：他の拠点、近隣都市のまちづくり資源及び住民との交流・連携を図り、広域的な賑わいを創出するための拠点。花園インターチェンジ周辺
- 産業拠点：工業などの主要な産業集積の拠点。
- 緑の拠点：大規模公園・緑地など、深谷の緑を代表する拠点。仙元山公園、埼玉県農林公園、鐘撞堂山、青淵公園、ふかや緑の王国*

●ゾーン ～深谷の土地利用のまとまり～

- 市街地ゾーン：市街化区域*、用途地域を中心としたゾーン。
- 田園ゾーン：農地を中心に、農業集落が点在するゾーン。北部は利根川沖積低地、南部は荒川扇状地*により構成される。
- 丘陵ゾーン：本市では数少ない丘陵地。秩父山地から比企丘陵につらなる丘陵地の外縁に位置するゾーン。

【将来都市構造図】



【都市づくりの体系】

